

中務集注釈（八）

古今集歌人伊勢の娘、中務の家集を取り上げ、注釈を試みる。本紀要五八号「中務集注釈（二）」以来、六三三号「中務集注釈（六）」に至る六回の論考において、中務集二類本、冷泉家時雨亭文庫蔵資経本二九八首の注釈の試みを終了した。前号「中務集注釈（七）」と本号において、資経本に収載されず、西本願寺蔵三十六人集、歌仙家集本および前田家旧蔵本のみが存在する歌の注釈を行う。なお、歌番号は西本願寺本、歌仙家集本、前田家旧蔵本の通し番号である。

「中務集注釈（二）」～（七）」について、ご教示を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

各歌の文責を次に示す。二〇〇～二〇二・二三八～二三九（加藤）、二〇三～二〇四・二四〇～二四一（斎藤）、二一九～二二〇（森田）、二二五～二二七・二二九～二三〇・二四八～二五〇（曾和）、二三二～二三五・二五三～二五四・一九七（歌）・二二五（前）（寶槻）、二三六～二三七・二四四・二四六～二四七（高野瀬）

高野晴代・高野瀬恵子・加藤裕子・
森田直美・斎藤由紀子・曾和由記子・
寶槻たまき

凡例

- 一 本注釈は、西本願寺本を底本とする。ただし、特有歌については、前田家旧蔵現出光美術館蔵伝西行単本、奈良女子大学蔵歌仙家集本をそれぞれ底本とする。
- 一 西本願寺本を底本とする歌について、本文の校合に用いた本は、以下の通り（一）内は、異同を掲出する際の略称）。
- 一 前田家旧蔵 現出光美術館蔵 伝西行筆本（前）
- 一 奈良女子大学蔵 歌仙家集本（歌）
- 一 和歌本文は読解の便のため、適宜仮名を漢字に、漢字を仮名に改めた。また、詞書内には必要に応じて句読点を施している。校訂した箇所や仮名漢字表記を改めた箇所は、右にルビで底本での表記を示した。
- 一 底本を校合本によって校訂した箇所は、「語釈」もしくは、「補説」に、

その理由と共に明記した。

一 本注釈に類出する先行研究論文は、以下の略称を用いる。

① 稲賀敬二氏『女流歌人 中務―歌で伝記を辿る―』（新典社 平・

二一）↓『女流歌人中務』

② 木船重昭氏『中務集相如集注釈』（大学堂書店 平・四）↓木

船注釈

二〇〇番歌

雨の降る夜、人の来たりけるに

月見にと来ぬ宵あまた過ぎにしを雨もよに来じと思ひけるかな

〔異同〕 雨のふる夜↓雨ふるに（歌）、きたりけるに↓きたるに（前）

きたりしに（歌）、つき見にと↓月よにも（前）月見にも（歌）、

こぬよひ↓こぬよの（歌）、すきにしを↓過ぬれば（歌）

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○来ぬ宵あまた過ぎにしを 男が訪ねてこない宵が度重なった

ので。「宵」は夜、特に夜に入って間もない頃。男性が女性の家に通って来る時間帯。「我が背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛の振舞ひかねてしるしも」(古今・墨滅歌・一一一〇 衣通姫)。○雨もよに来じと「雨もよに」は、「雨の降る中を」の意。「雨もよに」の「よに」に、「決して〜ない」意の副詞「よに」を掛ける。「こち風は今日ひぐらしに吹くめれど雨もよにはたよにもあらじな」(大和物語・百十二段)。

〔通釈〕 雨の降る夜、人が来たので

月を見にいこうと言ってあなたが来ない夜が多く過ぎてしまっておりましたので、雨の降る中を決してお越しにならないだろうと思っております。

〔補説〕 月を見に行こうと言いながら長い間訪れなかった男が雨の日をやってきたので、月が見える日に来ないのに、ましてや雨の日に来るとは思いませんでしたと皮肉を言った。月の美しい夜には来訪が期待されるが、雨の夜には来ないと考えるのが普通であった。「月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむわびつつも寝む」(古今・恋五・七七五よみ人しらず)。

また、『後撰集』に当該歌と類似した表現の歌があり、注意される。「男のまで来て、ありありて雨の降る夜、大傘を乞ひにつかはしたりければ／月にだに待つほど多く過ぎぬれば雨もよに来じと思ほゆるかな」(恋六・二〇二一 伊衡女今君)。

二〇一番歌

人に

袖敷きて臥しし枕を思ひ出でて月見ること音をも泣かな

〔異同〕 ねをもなくかな↓ねをのみぞなく（歌）

〔他出〕 玉葉・恋五・一八〇七、麗花・恋・一〇〇、秋風・恋下・

九〇二

〔語釈〕 ○袖敷きて 男女が互いの袖を敷き交わすこと。共寝する意。

〔さむしろに衣片敷き今宵もや我を待つらむ宇治の橋姫〕(古今・恋四・

六八九 よみ人しらず。「袖敷きて」は、あまり用例をみない表現。○
臥しし枕 共寝した思い出の枕。「背子が来て臥しし傍ら寒き夜は我が
手枕を我ぞして寝る」(和泉式部・七七)。○音をも泣くかな 声をあげ
て泣く。「夕されば佐保の川辺にゐるたづのひとり寝がたき音をも泣く
かな」(伊勢・四〇八)。男の訪れが途絶え、ひとり寝の悲しみに泣く様
をうかがわせる。

〔通釈〕 人に

あなたと袖を敷き交わして寝た枕を思い出して、月を見ることに
声をあげて泣くことです。

二〇二番歌

七月八日

忌むといへば忍ぶものから夜もすがら天の川こそ羨まれつれ

〔異同〕 七月八日↓七月七日(前) ナシ(歌)、あまのはらにぞ↓あま
のかはこそ(前・歌)、うらやまれつる↓うらやまれける(前)

〔他出〕 玉葉・恋四・一六三二(伊勢)、麗花・恋上・八四(伊勢)、伊勢・
四四六

〔語釈〕 ○七月八日 「補説」参照。○忌むといへば 「忌む」は、不吉
として避ける、嫌う。「月をあはれと言ふは忌むなりと言ふ人のありけ
れば／＼独り寝の侘しきままに起きあつつ月をあはれと忌みぞかねつる」
(後撰・恋二・六八四 よみ人しらず)。ここでは、七夕の二星のように、
年に一度しか逢えなくなるかもしれないので、七月七日に逢うことを忌

むのである。「今宵来む人には逢はじたなばたの久しきほどに待ちもこ
そすれ」(古今・秋上・一八一 素性)。○天の川こそ羨まれつれ 底本
の本文では歌意をとりにくい。前田家旧蔵本の本文を参考に改めた。「れ」
は自発。「つれ」は動作・作用が完了・終結したことを表わしており、
七月八日の朝の時点で昨夜のことを述べたもの。

〔通釈〕 七月八日

七月七日の夜に逢うのは不吉と言うので、逢うのを我慢していた
けれども、一晚中二星が逢っている天の川が羨ましくなりませ
んでした。

〔補説〕 他出の『玉葉集』『麗花集』では作者は伊勢であり、『伊勢集』
にもあることから、伊勢の歌の混入も疑われる。七月七日の夜に逢うと
七夕の二星のように年に一度しか逢えなくなるので逢うのを我慢してい
たが、年に一度とは言え今夜逢っている二星のことが羨ましくてならな
かった、と七月八日に前夜を振り返って詠んだ歌。

二〇三・二〇四番歌

人

高砂の尾上に立てる松をだに折れば折りつる我と知らなん

返事

高砂の松は折れども霜枯れに混じれる枝を知る人ぞなき

〔異同〕 人↓又ひとに(前)、まつをたに↓まつたにも(前)、返事↓かへし(前) 我とも↓おれとも(前・歌)、まされるえたを↓しほる、はなを(前) まされるはるを(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○高砂の尾上に立てる松をだに「高砂の松」は「かくしつづ世をやつくさむ高砂の尾上に立てる松ならなくに」(古今・雑上・九〇八 よみ人しらず)のように、あまりの長命ゆえ孤独なものとして詠まれることも多い。女性に喩えた詠として「さをしかのつまなきこひを高砂の尾上の小松ききもいれなん」(後撰・恋六・一〇五六 源庶明)がある。ここでは「だに」を用いて、高砂の松を取って簡単に手折ることのできるものとして例示し、中務を並みの男には手の届かぬ高嶺の存在として遇した表現か。○折れば折りつる 女性を手に入れることを花や枝を折る行為に託した。○折れども 底本は「我とも」で、「高砂の松」が「我(中務)」とされているが歌意不明のため他本により校訂した。○霜枯れに混じれる枝 「霜枯れ」は、「霜がれにみえこし梅は咲きにけり春にはわが身あはんとはすや」(貫之・八三七)のように不遇の我が身を重なる詠み方の他、「枯れ」に「離れ」が掛けられた用例が多く、常緑の松とは相容れない。年を経たものとしてもよく詠まれる「高砂の松」に喩えられたことから、老いの白髪を連想させる「霜枯れの枝」を持ち出し、老いた自分は男が折ろうとする「松」ならぬ「霜枯れの枝」に過ぎないと謙遜した歌として解した。

〔通釈〕 人

高砂の峰の頂きに立っている松でさえ折れば折ってしまう私であるのと知っていたきたい。松のごとき孤高の存在であるあなたのことも手に入れてみせませぬ。

返事

高砂の松は折っても、霜枯れの枝のように見捨てられた存在の私のことなど知る人もありません。

二一九番歌

また、人の料に

まつほどの遠江こそわびしけれ勿来の関に今は障らじ

〔異同〕 まつほどの↓まつ人の(歌)、とほたうみ↓とほたあうみ(前)とをたうみ(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○人の料 誰の、どういった用途のために詠んだものかは不明。遠江、勿来の関が詠まれることから察するに、名所絵屏風などのために詠んだ歌か。○遠江 「とほつあふみ」とも。都に近い「近つ淡海」(琵琶湖)に対し、都に遠い「遠つ淡海」(浜名湖)のある国を遠江と称す。現在の静岡県西部。ここでは地名に、待つ時間が長い意の「遠し」を掛ける。○勿来の関 陸奥国の歌枕。現在の福島県いわき市。「な来そ(来るな)」との掛詞で詠まれる場合が多く、男女が逢うことをへだてるものと捉えられている。

〔通釈〕 また、人の料として、

あなたを待つ時間が長く久しく、わびしい気持ちでおります。お出でを妨げる勿来の関も、今は障りとはならないでしょうに。

〔補説〕 遠江と勿来の関を同時に詠む例は僅少だが、『平中物語』に、

以下のような贈答歌が確認できる。

また、この男、久しうものいひわたる人ありけり。「ほど経ぬるを、みづからいかむといへば、返りことに、女、

あることの遠江とほがみなるわれなれば勿来の関もみちのまぞなき

男、返し、

勿来てふ関をばすゑであふことを近江ちかたうみにも君はなさまむ

かういへど、この女さらにははず、上衆めきければ、男いひわびて、ものもいはざりければ、いかが思ひけむ、女いひたり。

(平中物語・十五段)

当該歌との前後関係は明らかにできないが、同時代の例として注目される。

二二〇番歌

雨ふる夜、人々などものなどの言ひて寝ぬるを、思ふ心おもこころにてある人に

をやみせぬ雨あめにしをれてとこなつは今宵こよひふしぬと聞くはまことか

〔異同〕 人〈なと↓人の(前) 人と(歌)、ぬぬる↓たちぬる(前)、

おもふこゝろにてある人に↓おもふ心あるひとにかはりて(前) おもふ人にかはりて(歌)、とこなつは↓とこなつの(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○人々ものなど言ひて寝ぬるを 底本「人々などものなど」と

あるが、はじめの「など」は衍字と見て校訂した。女房たちが寄り集まって語り合い、そのまま皆で寝たというような状況と察せられる。○思ふ心にてある人に 「思ふ心」がどのような心情であるのかは断定できない

いが、悲恋、離別等に心を痛めている様子が想像される。歌仙本、前田

家旧蔵本では、「人にかはりて」とあり、当該歌は代作として詠んだ可能性もあるが、ひとまず底本のまま解釈した。○をやみ 雨や雪が少しの間やむこと。和歌においては、「をやみせぬ」「をやみせず」といった

否定の形で、恋愛歌や哀傷歌に、とめどない涙の比喩として用いられる

ことが多い。「をやみせず雨さえ降れば沢水のまさるらんとも思ほゆる

かな」(後撰・恋一・五三七 よみ人しらず)。○とこなつ 「思ふ心にて

ある人」の比喩。「とこ」に「床」を掛け、常夏が雨にしておれて倒れて

しまうことを、物思いする人が涙にくれて床についたことと重ねて表現

する。○聞くはまことか 聞きおよんだことの真偽をたずねる形で、その事実に対する驚きや叱責の念を強調する。「右衛門督、入道し侍りし

につかはしし／増鏡ふたたび世にやくもるとて塵を出でぬと聞くはまことか」(元輔・二五〇)。

〔通釈〕 雨が降る夜、人々が語り合った後に床についた際、物思

している様子の人に、

絶え間なく降る雨のように、とめどなく涙を流し、気を落としたまま、今夜おやすみになったというのは本当でしょうか。

二二五番歌

寝る折よみもなくてや床とこに明かすべき夢ゆめとだにこそつらきを見め

〔異同〕 ぬるよりも↓ぬるおりも(歌)、なみはやとにも↓なくてやと

こを(歌)、つらきを見め↓つらきをはみめ(歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕 なし

「語釈」 ○寝る折も 底本は「ぬるよりも」。底本のままでは、後に続く言葉との繋がりが解釈しがたいため、歌仙本によって校訂した。「草枕寝る折もなく鈴虫はなくを旅寝にあかずなりけり」(中務(資経本)・一一一)。
○なくてや床に明かすべき 底本は「なみはやとにもあかすへき」。このままでは歌意が不明であるので、歌仙本を参考に「なくてや床に」と本文を改めた。「補説」参照。一人、寢床で夜を明かすこと。
○夢とだに せめて夢として。前時代や同時代では例が見出せない表現。ここでは、相手の冷淡な態度こそ夢と思う意。「うつつにもはかなき事」のわびしきは寝なくに夢と思ふなりけり」(後撰・恋三・七〇三 よみ人しらず)。

【通釈】

眠る間もなく、一人、寢床で夜を明かさなければならぬのでしようか。あの人の冷淡な態度こそ、せめて夢のことと思うのがいいでしょう。

【補説】 「語釈」でも述べたように、当該歌は上句が解釈しがたい。木船注釈では「転倒ミスもふくむ誤写であろう」として、「寝るよりもなみだやともに明かすべき」と校訂している。「ぬる」が「寝る」と「濡る」の掛詞と解釈するならば、木船氏の試案のように「涙」を詠み込むほうが修辭は活かされよう。

従来、夢を詠んだ歌では「思ひつつ寝ればや人の見えつらむ夢としりせば覚めざらましを」(古今・恋二・五五二 小町)、「思ひ寝のよなよな夢に逢ふ事をただ片時のうつつともがな」(後撰・恋三・七六六 よみ人しらず)などのように、夢の中でだけは逢える、またそれを現実としたいと詠む歌が多いのに対して、当該歌は、現実の辛さを夢と思いたいという逆の発想で詠んでいるところに工夫がある。

西本願寺本の配列を見ると、当該歌の前後は「何ごとも思ふともなく夜もすがら寝ぬに明けぬる夜をぞうらむる」(二二四)、「かからむと思はん人の夢路にもつらき心を見えじとぞ思ふ」(二二六)という歌である。独り寝のわびしさを讀んだ歌として、同趣の歌とともに配列されているように思われる。

二二七番歌

よそにのみあふみの海はかひなくて恋しき浪ぞ立ちわたりける

【異同】 あふみのうみは↓あふみのうみと(歌)、(前) ↓歌ナシ

【他出】 なし

【語釈】 ○よそにのみあふみの海 「よそにのみ」は自分と関係ない他人事としての意。「秋ふかみよそにのみきく白露のたが言の葉にかかるなるらん」(後撰・秋下・四二五 平伊望)。「あふみ」は、地名の「近江」に「逢ふ身」を掛ける。当該歌では、相手が余所にばかり逢瀬を重ねていて、私は待つ甲斐もないという意味で解釈した。○かひなくて 「かひ」は「貝」と「甲斐」の掛詞。「伊勢の海のちひろの浜にひろふとも今は何てふかひかあるべき」(後撰・恋五・九二七 敦忠)。○恋しき浪 「恋しき浪」に「頻浪」を掛ける。頻浪は頻りに寄せてくる波。頻りに浪が寄せるように、恋しさも募る意。「ほのぼのとあかしのうらをこぎくれば昨日こひしきなみぞたちける」(重之・一〇〇)。

【通釈】

余所ではかり逢瀬を重ねるあなたは待つ甲斐もなく、恋しさが頻りに募ることです。

二二九番歌

かひなくて明石の浦の秋風に恋しき浪ぞ立ちまさりける

〔異同〕 たちまさりける↓立わたりける (歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕 夫木抄・雑五・一〇三七・一

〔通釈〕

あなたの訪れを待った甲斐もなくて夜を明かし、飽きられてしまつたのに、秋風を感じるにつけて恋しさが増して募ることです。

二三〇番歌

秋風の吹く折にしもとはぬかな萩の葉ならば音はしてまし

〔異同〕 吹をりにしも↓ふくおりふしも (歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕 後撰・恋四・八四六、古今六帖・第六・三七一八、三十人撰・

一二九、和漢朗詠・四〇一、類聚証・二八、俊成合・一〇六、時代

不動歌合・一七五、女房三十六人歌合・一三

〔語釈〕 ○秋風の吹く折にしもとはぬかな「秋」に「飽き」を掛ける。

秋風が吹くまさにその折に、あの人は私に飽きて訪れもないの意。○萩の葉ならば音はしてまし 萩は薄に似た多年草。「音」は、萩の葉の葉擦れの音の意味と、訪れの意味を掛ける。貫之の「萩の葉のそよぐ音こそ秋風の人に知らるるはじめなりけれ」(貫之・一〇〇)を踏まえるか。

〔通釈〕

秋風が吹くまさにその折に、あなたは私に飽きて訪れもないことですよ。萩の葉だったならば、秋風が吹いて葉擦れの音をさせますのに。

〔補説〕 『後撰集』の詞書には「平かねきがやうやうかれがたになりにければ、つかはしける」とある。平かねきは未詳。岸本由豆流『後拾遺集標注』(和泉書院 平・元)では、「さねき」の誤写かとする。平直材

は、平時望男、従四位下伊勢守。安和元年(九六八)没。六九歳。

二三一番歌

あだに散る花も春ともみながらに水の上こそまづ言はれけれ

〔異同〕 はなもはるとも↓花うけなむと (歌)、みなからに↓みるからに (歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○あだに散る花 はかなく散る花。桜の花か。「枝よりもあだに散りにし花なれば落ちて水の水の泡とこそなれ」(古今・春下・八一

菅野高世)。○みながらに「見ながら」に、「すべて皆」の意の「皆がら」を掛ける。○言はれけれ 人々の口の端にのぼるの意。

〔通釈〕

はかなく散る花ともあだに過ぎる春とも目にとめて、花、春と言えばことごとく、水面の花こそがまず話題にされることです。

二三三番歌

今日までと流れ出でぬる水上に花は昨日や散り果てにけむ

〔異同〕 なかれないぬるなみなかに↓なかれてなむ水上の（歌）

〔他出〕 伊勢・九九

〔語釈〕 ○今日までと 散った花が上流から流れてくるのは今日までだと惜しむ表現。「今日までと見るに涙のますかがみなれにし影を人にかたるな」（拾遺・雑上・四六九 よみ人しらず）。○流れ出でぬる水上 底本「なみなか」。「なみなか」の語は他例を見出しがたく、歌仙本により「水上」に校訂した。水上から流れてくる花を見て、上流で花が散ったことを類推する。「水上にもみぢ散るらし宇治川の瀬々さへ深くなりまさるなり」（元真・一七三）。○花は昨日や散り果てにけむ 花は昨日散り果てたのだからかの意。「里はみな散り果てにしをあしひきの山の桜はまだ散らずけり」（躬恒・四〇一）。

〔通釈〕

散った花が流れ出てくるのは今日までだとばかりに流れ出た、その水上で、花は昨日散り果ててしまったのでしょうか。

〔補説〕 〔他出〕 に示した『伊勢集』では、京極院での花の宴に際する一連の歌の中の一首であり、「今日までは流れ出でぬを水上の花は昨日や散り果てにけむ」（伊勢・九九）と異同が見える。『伊勢集』の本文では「今日はもう花が流れ出て来ないが、水上の花は昨日散り果ててしまったのだからか」の意となる。二三三番歌の参考歌として書き加えられた伊勢の歌が本文化した可能性も考えられる。

二三四番歌

わびしくはあらぬまでもにも憂へつつ人に言ふべきことのなきかな

〔異同〕 わびしくは↓恋しくは（歌）、ならぬまでも↓あらぬまでも（歌）、ことのなきかな↓ことならぬかな（歌）、（前）↓歌ナシ

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○あらぬまでもにも憂へつつ 底本「ならぬまでもにも」。歌仙本により「あらぬまでも」に改めた。死んでしまいそうなまでに嘆き続けて、の意。「長らへてあらぬまでもにも言の葉の深きはいかにあはれなりけり」（後撰・恋一・六〇〇 よみ人しらず）。○言ふべきことのなきかな 言う言葉もないことよ、の意。「かなしとも又あはれとも世の常に言ふべきことにあらばこそあらめ」（建礼門院右京大夫・二二四）。

〔通釈〕

わびしくて死んでしまいそうなまでに嘆きながら、あの人に言う言葉もないことです。

二三五番歌

年月の行くらむことも思ほえずあきばかりのみ人の見ゆれば

〔異同〕 ゆくらむことも↓行らむかたも（歌）、（前）↓歌ナシ

〔他出〕 伊勢Ⅲ・五〇六、拾遺・恋四・九〇六（伊勢）

〔語釈〕 ○年月の行くらむことも思ほえず 年月が移り変わって行くこ

ともわからぬ、の意。「息の緒に妹をし思へば年月の行くらん方も思ほえぬかも」(古今六帖・二五五〇)。○秋ばかりのみ人の見ゆれば「秋」に「飽き」の意を掛ける。

〔通釈〕

年月の移り変わりもわかりません。あなたは秋にだけ会いに来て、その後は訪れもなく私への飽きばかりが見えますので。

〔補説〕 「他出」に示した『伊勢集』や『拾遺集』では第四句が「秋のはつかに」と異同が見え、秋の果てに、ほんのわずかに男が姿を見せる意となって『中務集』の本文よりも解しやすい。

一三二六番歌

恋こひひしとも言いはばずまずまろに思おもはえて人ひとに知しられぬ音ね泣なくころかな

〔異同〕 なし(西本願寺本のみの所収歌)

〔他出〕 躬恒Ⅰ・三三三、躬恒Ⅲ・三五六

〔語釈〕 ○恋ひしとも言はば 主語は作者。〔補説〕 参照。○すずろに ここは、「理由がない、関係ない」の意か。「鶯にあらぬものからなきつつも春をすずろにすずべきかな」(敦忠・八七)。○思ほえて 自然とそう思われて。「まちくらす日は昔のねにおもほえてあふよしもなど玉のををならん」(後撰・恋四・八七〇 よみ人しらず)。○音泣く 声をあげて泣く。「音を泣く」と表現するのが一般的。

〔通釈〕

もしもあの人を「恋しい」と言うとしたら空しく思われて、人知れず声に出して泣くこの頃ですよ。

〔補説〕 「恋ひしとも言」うのは、相手か、作者自身か、両様に考えられるが、「言はば」と仮定表現であること、「思ほえて」「人に知られぬ音を泣く」のは作者であること等から、主語を作者として訳した。仮にあの人を「恋しい」と言うとしたら、相手は誠意が無い(或いは、私の思いを知らない)のだから、恋しく思うような理由がないと思われる、ひっそり泣いているこの頃よ、の意か。

〔躬恒集〕の二本(Ⅰ・Ⅲ)の末尾近い「人知れぬ恋」歌中にも見える歌。当該歌は躬恒の歌の混入か。

一三三七番歌

ありしだに憂うれかりしものを飽あかずとていづいここに添そふる辛つらさなるらむ

〔異同〕 なし(西本願寺本のみの所収歌)

〔他出〕 後撰・恋五・九五二、古今六帖・二二一〇、俊成三十六人歌合・

一〇七、女房三十六人歌合・一五

〔語釈〕 ○ありしだに憂かりし これまでだつてつらい思いをしていたのに。「だに」は、過去を軽いものとして例示し、現在の薄情な仕打ちを重いものとして強調する。○いづこに添ふる これ以上どこに添え加えるのか、の意。

〔通釈〕

私は今までも辛い思いをしていましたのに、まだ足りないといつもいのように、この上どこに加えるあなたの薄情さなのでしょうか。

〔補説〕 後世、「俊成三十六人歌合」「女房三十六人歌合」で、それぞれ三首ずつ取り上げた中務詠の一首であることから見て、中務の代表歌の

一つと見なされていたらしい。男の来訪を待ちわびる女の辛さを詠んだ、典型的な閨怨歌として評価されたのだろう。『後撰集』詞書によれば、「左大臣」すなわち藤原実頼に贈った歌。『女流歌人中務』は、実頼との関係について、『清慎公集』に「中将のころ」中務と交渉を持ったとあることから、延長六（九二八）年六月以後、承平三（九三三）年頃のことと推定している。源信明、実頼の弟師輔らとの関係も同じ頃の進行である。

なお、当該歌とよく似た作が、後世の歌合に見える。

ありしだにうかりしものをなぞもかく行へもしらぬ辛さそふらん

（元永二年七月一三日内大臣忠通家歌合・五〇 忠隆）

二三八番歌

訪ふことはいさやあはれと思へども辛きはいか知らせざるべき

〔異同〕 つらくは↓つらきは（歌）、しらせざるへき↓しられざるへき

（歌）、（前）↓歌ナシ

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○訪ふことは 恋人が訪問する意。「男の久しう訪はざりければ／訪ふことを待つに月日はこゆるぎの磯にや出でて今はうらみむ」〔後撰・恋六・一〇四九 右近〕。○いさやあはれと 「いさや」は、感動詞「いさ」に詠嘆の間投助詞「や」が付いたもの。「さあ」「さあ、どうだか。」と返答にためらう時に発する語。「人心いさや白浪高ければ寄らむ渚ぞかねてかなしき」（後撰・雑二・一一五四 よみ人しらす）。「あはれ」は、ここでは「まあ、うれしい」といった意。○辛きは 「辛し」は、

相手が薄情だ、冷淡だの意。「これまでのあなたのつれない態度は」の意。底本「辛くは」は、形容詞「辛し」の連用形に強意の係助詞「は」が付いたもの。仮定条件を表わし、「つれないのであるならば」の意となるが、一首の文脈上わかりにくい。よって、歌仙本により改めた。

〔通釈〕

訪ねてくださるのには、「さあ、まあ、嬉しい」とは思いますが、けれども、お越しになったら、あなたのこれまでのつれない態度は、どうして思い知らせないことがありますか。思い知らせることになりませんよ。

〔補説〕 詞書がないのでどのような状況で詠まれた歌か把握しにくい。日頃つれない相手が久々に訪ねると言ってきたのに対して、恨んだ歌ではないかと思われる。上句の「いさやあはれ」という表現からは、「訪ふ」という相手の言葉を手放しで喜んでいない様子がかがえる。また、下句には、もし訪ねてきたら、これまでのつれない態度を恨まずにはいられないという思いが見て取れる。

二三九番歌

憂さまさるわが身と知らでよそにのみ聞きし昔に返ししてしかな

〔異同〕 わか身としらて↓我身はしらす（歌）、むかしに↓昔を（歌）、（前）↓歌ナシ

〔他出〕 信明Ⅰ・八九、信明Ⅲ・四七

〔語釈〕 ○憂さまさる 「憂さ」は、物事が思いのままにならなくてつらいこと。「人心憂さこそまされ春立てばとまらず消ゆるゆきかくれな

む」(後撰・春上・三〇 よみ人しらず)。ここでは、相手との仲が思うに任せずつらいことを言う。○よそにのみ聞きし昔「よそに聞く」は、自分とは無関係なものとして聞く意。「のみ」は限定。「よそにのみ聞かましものを音羽川渡るとなしにみなれそめけむ」(古今・恋五・七四九兼輔)。男との関係がなかった頃を回想している。

〔通釈〕

あなたとの仲が思うに任せずつらい思いがつのる我が身とも知らずに、あなたを自分とは無関係な人と聞いていた昔に戻したいものです。

〔補説〕

題知らず

権中納言敦忠

逢ひ見ての後の心にくらぶれば昔は物も思はざりけり

(拾遺・恋二・七一〇)

この敦忠歌は、後朝の現在の思いと逢瀬以前の思いを対比したもののだが、当該歌と近い発想の歌と言えよう。

二四〇番歌

待つ^ま人の見えぬ^たからにやさ夜^よ更^よけて月^いの入るにも音^ねは泣^なかるらん

〔異同〕

たえぬからにや↓見えぬからにや(歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕

伊勢Ⅱ三六三・Ⅲ三六六、玉葉・恋二・一四〇〇、万代・恋二・二二一九(いずれも作者は伊勢、二句「見えぬからにや」)

〔語釈〕

○待つ人 通ってくるのが待たれる恋人。○見えぬからにや

恋人が訪れないからだろうか。底本は「絶えぬからにや」であるが歌意

不通のため他本及び他出により校訂した。○月の入るにも 月が山の端に入るほど夜が更けたということは、恋人を待つ身には今夜の訪れを諦めざるを得ない時間帯となるということである。

〔通釈〕

待つ人が訪れないから、夜が更けて月が山の端に入るにつけても、自然と声をあげて泣いてしまうのでしょうか。

〔補説〕

歌仙本と同様に第二句を「見えぬからにや」とする歌が『伊勢集』諸本に収載されている。西本願寺本『伊勢集』三五六番歌は「待人の見えぬからにやさ夜ふけて恋ぢにそでもぬれぬべらなる」と、下句が全く異なっているが、これは前歌「すむことのかたかるべきににこり江のこひぢに影のぬれぬべらなり」の下句に影響された誤写と考えられている。そのため、『伊勢集』諸注釈は他本により「月の入るにも音は泣かるらん」と校訂を加える。木船注釈は当該歌を伊勢作の混入とする。

二四一番歌

見し人を見ゆやといふに頼む^た夜は目も合^あひがたきものにざりける

〔異同〕 いふに↓夢を(歌)、(前) ↓歌ナシ

〔他出〕

なし

〔語釈〕

○見し人 男女関係をもった人。○頼む夜 恋人の訪れがあるのではないかと、言うので期待する夜。○目も合ひがたき 眠ることもままならない。○ものにざりける 「ざり」は、係助詞「ぞ」と補助動詞「あり」の短縮形。

〔通釈〕

お逢いた人がいらっしやるのではないかと言いますので、頼みにする夜は眠ることもままならないものでした。

〔補説〕 歌仙本の「夢を」を採用すると、「夢の内にあひ見む事をたのみつつくらせるよひはねむ方もなし」(古今・恋一・五二五 よみ人しらず)にかなり近い歌意となる。

二四四番歌

はるかなる山やまなくなくくにまつ虫むしの空そらにとふひと見えみにけるかな

〔異同〕 やまなくくくに↓山なかくくに(前) 山ならなくに(歌)、まつむしの↓夏虫の(歌)、そらにとふひと↓そらにとふ人(前)、空にたくひと(歌)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○なくなくに「なくなく」の用例は多いが、「なくなくも」の形か、「なくなく過ぐす」のように使われるのが普通。「なくなく」は他例が見出しがたい。「相坂のゆふつけ鳥にあらばこそ君がゆききをなくなくも見ぬ」(古今・恋四・七四〇 閑院)。○松虫 現在の「鈴虫」の古名(松虫と鈴虫が逆であった)とされるが、確かな根拠はない。当該歌と同じく、「山」とともに詠まれる例はある。「松虫のはつこゑさそふ秋風はおと山よりふきそめにけり」(後撰・秋上・二五一 よみ人しらず)。また、人を「待つ」意を掛けて詠まれることも多く、当該歌もそうであろう。「ひぐらしのこゑきくからに松虫の名にのみ人を思ふころかな」(後撰・秋上・二五五 貫之)。○空にとふひと 『新編国歌大観』三巻は、当該歌第四句を「そらにとふひと」と翻刻するが、「松虫」

が「飛ぶ」と詠まれる例は他にない。「空にとふ」は、「逢坂の山ほととぎすなのるなり関もる神やそらにとふらん」(千載・夏・一九〇 中納言師時)のような例がある。この例では「空で(神が)尋問する」の意。或いはここは、「訪ふ」「飛ぶ」の掛詞で、「空に」に空しい意を込めるか。また、「空に」には副詞「そらに」を掛けるか。「ひと」は「見ゆ」に続くところから「日」と解したが、或いはここも「人」を掛けるか。

〔通釈〕

遙かな山でしきりに鳴く松虫の声が、恋人を待つ私のもとに空しく訪れる日と思われることです。

〔補説〕 異同が多く、また、どの本の言葉を採用しても、意が通じにくい歌。すべての本に共通の言葉は、「はるかなる山」「虫の」「空に」「見えにけるかな」である。ここは底本どおりとし、「語釈」に示した『後撰集』の二首を参考に解釈しておく。「鳴く鳴く泣く泣く」「松待つ」「空にそらに」「訪ふ・飛ぶ」「人・日」と、掛詞を重ねた言語遊戯を主とした歌であろうか。

二四六番歌

憂うれしと思ふ心おものくまのなきときは辛つらさ隠かくれぬものにざりける

〔異同〕 こゝろのくまの↓こゝろのてまの(前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○憂しと思ふ「憂し」は辛いことや悲しいことがあり、それを嫌だと思ふ意。「身を憂しと思ふにきえぬ物なればかくてもへぬるよにこそ有りけれ」(古今・恋五・八〇六 よみ人しらず)。「憂し」は第四

句の「辛さ」と対になる。○心のくま 心の中の暗い部分、心中に秘めたことの意味。秋の夜の月の光はきよけれど人の心のくまはてらす「後撰・秋中・三三三 よみ人しらず」。「くま」と第四句の「隠る」は縁語で、「くまなき」「隠れぬ」は同様の意をあらわす対の表現。○辛さ隠れぬ ここは、相手の薄情さがあらわである意。

〔通釈〕

私の辛いと思う心が表に現れている時は、あなたの薄情さもあらわであることです。

〔補説〕「心のくま」は、女が男の不誠実をなじったりするような場面で用いられる。例えば、

男の隔つることもなく語らはんなど言ひちぎりて、いかが思ほえけん、「ひとまには隠れ遊びもしつべくなん」と言ひては
べりければ
和泉式部

いづくにか来ても隠れむ隔てたる心のくまのあらばこそあらめ

(後拾遺・雑二・九一九)

では、男の「人がいない時には、隠れ遊びもしたい」という思わせぶりの発言に対して、和泉式部が「どこに隠れようというのか、私の心には暗がり(秘密)などはないのに」とピシヤリと言ったものである。当該歌も、男の不実が背景にあったか。

二四七番歌

人待つと泣きつつ過ぐす夜な夜なはいたづら寝にもなりぬべきかな

〔異同〕 人まつと↓人つまと(前)、なきつ、すくす↓なきつ、あかす

(前歌)、いたづらねにも↓いたづらにのみ(前) いたづらなにも(歌)、なきぬへき□な↓なりぬへきかな(前・歌)

〔他出〕 伊勢Ⅰ・三七三、伊勢Ⅲ・三七七

〔語釈〕 ○人待つ 恋人を待つ意。「花見つつ人待つ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける」(古今・秋下・二七四 友則)。○いたづら寝 「いたづら」は、物足りなく空虚なさま。ここは、待つ男が来ないために、空しい気持ちでする一人寝を言う。○なりぬべきかな 底本「なきぬべき□な」。他本により「なき」を「なり」に校訂し、不明瞭な箇所□をも補う。

〔通釈〕

あの人を待って、泣きながら過ごしている夜は、毎夜空しい一人寝になってしまいうるなことです。

〔補説〕 当該歌は、西本願寺本『伊勢集』では、次のような配列中に見える。
みかどの御

花すすき呼子鳥にもあらねども昔こひしきねをぞなきぬる
わが袖のかはりにおふる花すすき人を招くとしらざらめやは
さ夜ふけて寝られぬ折はほととぎす君にきかれぬねをぞなきぬる
人まちて泣きつつあかす夜な夜なはいたづら寝にもなりぬべき哉
五月来ばなきもふりなむほととぎすまだしきほどの声をきかばや

(三七〇～三七四)

三七〇番詞書「みかどの御」が、三七一番歌以降にもかかるわけではないが、当該歌の次の「五月来ば…」は、『古今集』夏歌・一三八番に伊勢の歌として見える歌。歌仙本では、

御門の御国忌に

いとす、き呼子鳥にもあらねども昔恋しき音をのみぞなく

人まちてなきつ、あかす夜な夜なはいたづらねにも成ぬべきかな

(三七六～三七七)

の並び方で見える。このような『伊勢集』におけるあり方に対して、『中務集』西本願寺本では、末尾に並べられた歌の一首である。こうした状況から、当該歌は伊勢の歌の混入の可能性が高いと思われる。

なお、『兼盛集』にも、

女のもとにまかりて、いたづらに寝てかへるに

あふ事のなきつつ帰る夜な夜なはいたづら寝にもなりにけるかな

(兼盛集・三八)

と、極めて似た歌があり、当該歌の影響なども考えられるか。

二四八番歌

日暮るればまづぬる萩はさ牡鹿の鳴く声にだにおどろきやせぬ

〔異同〕 おどろきやせぬ↓おどろきやする (前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○まづぬる萩は「ぬる」は「寝る」と露に濡れる意の「濡る」との掛詞。「起き明かす露の夜な夜なへにければまだきぬる」とも思はざりけり(後撰・秋中・二八三 師輔)。○さ牡鹿の鳴く声に 牡鹿が妻を求めて鳴く声。鹿と萩は『万葉集』で「我が岡にさ雄鹿来鳴く初萩の花妻問ひに来鳴くさ雄鹿」(卷八・一五四一 太宰帥大伴卿)と詠まれるように、萩が鹿の妻と見なされて共に詠まれることが多い。○おどろきやせぬ 「や」は反語。おどろかないことがあろうか。

〔通釈〕

日が暮れると、まっさきに露に濡れた萩は、さ牡鹿が妻を求めて鳴く声だけでもおどろかないことがあるでしょうか。露を落としてしまします。

〔補説〕 当該歌は「を鹿ふす夏野の草の道見えずしげき恋にもまどふろかな」(是則・二八)、「秋の野に妻なき鹿のひとり伏しふせど寝られぬ身こそすべなし」(忠岑・二五)のように、「鹿が伏す」という常套的な表現ではなく、萩が「寝る」としたところに工夫がある。

後代に当該歌と同趣の歌が見られる。「濡る」と掛けられた言語遊戯でもある。

鹿

夕霧に妻まどはせる鹿の音や夜寝る萩もおどろかるらん

(伊勢大輔・六一)

古人のよめる詞を題にてよみける秋の歌の中に

日暮るれば打ち寝る萩をよもすがら露のおきゐて恨むべらなり

(六帖詠草・九七六)

二四九番歌

恋しきも心づからの業なればおきどころなくもてぞわづらふ

〔異同〕 こ、ろつからのわさ↓心づからのこと (前)、おきどころなく↓をきどころさへ (前)

〔他出〕 なし

〔語釈〕 ○心づからの業 「業」は出来事、事柄の意味。自分自身の心

によるもの。「かけていへば涙の河のみを速み心づからやまたは流れむ」(伊勢・一八)。○おきどころもなく 上句の恋しさは心の中にある、ということを受け、ここでは、「他に置いておく場所もない」の意○もてぞわづらふ 扱いに困る、もてあます意。他例が少ない表現。「あひみてもなほなくさまぬ恋なれば我が身なれどももてぞわづらふ」(麗景殿女御歌合・二六)。

〔通釈〕

あの人を恋しいと思う気持ちも自分自身の心によるものなので、他に置いておく場所がなくて持て余すことです。

二五〇番歌

久しくわづらふころに

たくなはの夏のひぐらし苦しくてなどくながき命なるらん

〔異同〕 ところに↓ころ (前・歌)、たなはたの↓ひぐらしの (前) たくなはの (歌)、くるしくは↓くるしくて (前・歌)、なとうらななき↓

〔他出〕 麗花・恋・九四

〔語釈〕 ○久しくわづらふころに 底本では「わづらふところ」に。「と

ころに」であると、他の対象を指すことになるので歌意に合わない。他本により「わづらふころに」と校訂した。長く病気であった頃の意。

○たくなはの 底本では「たなはたの」。底本のままでは意味が解し難いため歌仙本により校訂した。「栲縄」は、海人が海に入る時につける

縄。「繰る」ことから「苦し」の「くる」を導いたり、栲縄の長さから

「ながき」を引き出したりする言葉。「伊勢の海に延べてもあまるたくなはの長き心は我ぞまされる」(後撰・恋一・五七九 よみ人しらず)。○ひぐらし 一日中の意味の「日暮らし」に「鯛」を響かせる。短命な「鯛」と「いのち長し」とを対比させた表現。○苦しくて 底本では「苦しくは」で仮定表現である。歌意に合わないため他本により校訂した。○などくながき 底本では「などうらながき」。「うら」は心の意味で、「うらながき」で「心の中で長いと思う」のような意味になるか。しかし、用例が見出せないため、他本によって校訂した。

〔通釈〕 長く病気であった頃

夏の一日中苦しくて、どうしてこんなに長命を保っているのでしょうか。

〔補説〕 当該歌は木船注釈では歌の内容から、中務が年を取ってからの詠かとする。しかし、『麗花集』九四番歌は、異同があるものと同じ歌かと考えられ、恋歌として収載されているのが興味深い。

男の見えはべらざりければ

中務

たくなはの夏の日暮らし恋しくてなどくながき今日にかあるらん

二五三番歌

粟田の右大殿、夜深く帰り給て、こたに日かげをつつみてたまはせたりしに、聞こえさせし

つつめどもこたに人目の繁きよにあげば日かげのまばゆからまし

〔異同〕 なし（西本願寺本のみの所収歌）

〔他出〕 馬内侍・一四〇

〔語釈〕 〇粟田の右大殿 藤原道兼。父は摂政太政大臣兼家。粟田の地（現京都市東山区）に山荘を営んだことから、粟田殿とも呼ばれた。〇夜深く帰り給ひて 日陰蔓を贈っていることから、大嘗祭や新嘗祭が終わった後、夜遅くに訪れたか。〇つつめども 日かげを「包む」意と人目を「つつむ」意を掛ける。〇こたに 地名かと思われるが、不明。〇人目の繁きよ 「夜」に男女の仲の「世」を響かせる。大嘗祭などが行われた日であり、人目が多い夜の意。〇あけば 包みを「開く」と、夜が「明く」の意を掛ける。「玉匣あけば君が名立ちぬ夜深く来しを人見けむかも」（古今・恋三・六四二 よみ人しらず）〇日かげ 「日の光」と「日陰蔓」との掛詞。日陰蔓は大嘗会などの神事に物忌みのしるしとして冠の左右に垂らした。「有明の心地こそすれさかづきにひかげもそひて出でぬと思へば」（能宣・六三三）。〇まばゆからまし 夜であっても包みを開けたら日陰蔓は「まばゆいほどの美しさであろうに」、の意。夜が明けたら陽の光が眩しく自分たちの仲が明るみになって「恥ずかしいだろうに」の意を掛ける。「思ひきやかけてもかくはゆふだすき今日の日かげにまばゆからむと」（仲文・一一二）。

〔通釈〕 右大臣殿が、深夜にお帰りになって、「こた」に日陰蔓を包んでくださった時に、申し上げた歌

人に知られないように包み隠しても、人目が多いこの夜に包みを開けたら、日陰蔓の美しさはまばゆいことでしょう。

〔補説〕 当該歌と次の二五四番歌は『馬内侍集』に収載され、『中務集』では西本願寺本のみの所収歌で、末尾の二首となっている。『馬内侍集』の歌が混入したものと思われる。

二五四番歌

ある所より、衣手の森といふ所を絵にかかせたまひて、詠みにたまはせたりし

春は花秋は紅葉と誘はれて人の立ち寄る衣手の森

〔異同〕 なし（西本願寺本のみの所収歌）

〔他出〕 馬内侍・一四一、万代・三二三八（馬内侍）、歌枕名寄・一六二五（馬内侍）、夫木和歌抄・一〇〇七〇（馬内侍）

〔語釈〕 〇衣手の森 現在の京都市西京区嵐山宮町の松尾大社の近くにあったと推定される歌枕。〇春は花秋は紅葉 衣手の森の季節ごとの美しい景物をいう。「春の花秋の紅葉も忘れぬからなでしこのにほふさかりは」（定頼・一四八）。〇誘はれて人の立ち寄る 花や紅葉の素晴らしさに誘われて人々が立ち寄る意。「立ち寄る」に「裁つ」と「縫る」の意を掛け「衣手の森」の「衣」と縁語関係を作る。「世をいとひ木のもとごとくに立ち寄りてうつぶし染めの麻のきぬなり」（古今・雑体・一〇六八 よみ人しらず）。

〔通釈〕 ある所から、衣手の森という所を絵に描かせなさって、歌を詠むのにくださった時に詠んだ歌

これは、春は花、秋は紅葉の美しさに誘われて、人が立ち寄る衣手の森です。

《歌仙家集本のみの所収歌》

一九七番歌

また人

花をこそ人や折るとて咎めしか数ならぬ身をいかにかはせん

〔異同〕 なし（歌仙本のみの所収歌）

〔他出〕 順集・二五五

〔語釈〕 ○また人 源順。「補説」参照。○花をこそ人や折るとて咎め

しか 係り結びの逆説的用法。花を人が折るのかと咎めました、の意。

○数ならぬみ 数ならぬ梅の「実」と取るに足りない我が「身」の意を

掛ける。「逢ふ事の年ざりしぬるなげきには身のかずならぬ物にぞ有り

ける」（後撰・雑二・一九七 せかゐの君）。○いかにかはせん 梅の

実をとられたことと、取るに足りない自分がそのことに文句をいっても

どうしようもない、と詠む。「盗むともこは憎からぬことと知れこふに

は知らずいかにかはせむ」（赤染衛門・三九八）。

〔通釈〕 また人が詠んだ歌

花こそは人が折るのかと咎めました、取るに足りない梅の実を

取られてもどうしましょうか。取るに足りない私が文句を言っ

ても、どうしようありません。

〔補説〕 当該歌は歌仙本一九三番歌の「門さして和泉守順のあそふ垣を

隔てであるに、梅をこなたの人入りととりたりと言ふを聞き、むめを

やりたれば、順」という詞書から始まる、中務と隣人である源順の梅の

実をめぐる贈答歌群の最後の一首である。「他出」に示した通り、『順

集』にもこの贈答歌群が収載されている。しかし、『中務集』において、

当該歌は歌仙本のみが有する歌であり、他の諸本は当該歌を欠いた四首

のみが収載されている。加藤裕子『中務集』歌仙家集本の意義―伝

公任筆中務集切とおして―（『語文』一四五・日本大学国文学会・平

二五）では、梅の実を巡る贈答歌群について、当該歌を有する歌仙本系

のみが本来の形をとどめているとして、「歌仙本系は西本願寺本系の欠

陥を補い得る側面を持つているのである」と指摘している。なお、この

一連の贈答については「中務集注釈（四）」一八四―一八七番として注

釈を施している。

《前田家旧蔵本のみの所収歌》

二一五番歌

如月まで梅の花咲かざりける所

知るらめや霞の空を眺めつつ花もにはほぬ春を嘆くと

〔異同〕 なし（前田家旧蔵本のみの所収歌）

〔他出〕 公任・五、新古今・春上・三九（中務）

〔語釈〕 ○知るらめや 梅は知っているのだらうか、の意。二月になっ

ても咲かない梅に対し、文句をつけるかのように呼びかけている。「知

るらめや日数のみふるながめには花の袂もただならぬかな」（御堂・

一七）。○花もにはほぬ春 春になり霞も立っているのに、花が咲き匂

わない春をいう。この場合「匂ふ」は「照り映える」と「香る」の意を

掛ける。「春たてど花もにはほはぬ山里はもの憂かる音に鶯ぞなく」(古今・春上・一五 在原棟梁)

〔通釈〕 二月まで梅の花が咲かなかった所

私が霞立つ空を眺めながら、花も咲き匂わない春を嘆いていることを、梅は知っているのでしょうか。

〔補説〕 当該歌は、前田家旧蔵本のみの所収歌であり、『公任集』では公任の歌として、『新古今集』では中務として収載されている。森本元子「前田家本中務集の一首と公任集自撰歌稿のこと」(『和歌史研究会会報』昭四九・八)に、前田家旧蔵本に竄入した公任歌稿から中務の歌と速断したものか、との指摘がある。

高野 晴代 (日本女子大学教授)

高野瀬恵子 (日本女子大学非常勤講師)

加藤 裕子 (日本大学大学院博士課程後期単位取得満期退学)

森田 直美 (川村学園女子大学講師)

斎藤由紀子 (日本女子大学大学院博士課程後期単位取得満期退学)

曾和由記子 (日本女子大学学術研究員)

寶槻たまき (日本女子大学大学院博士課程後期在学)